ろくおん通信

発行日：　１９９０年４月１５日

No．２５号

発行者：　盲人情報文化ｾﾝﾀｰ録音製作

「打ち合せ」の例　その2

“注” の処理について

“注”の処理をどうするかは、悩むことの多い問題だと思います。特にＩＣＣＢの蔵書やリクエストの本には、“注”がよく出てきます。“注”の処理には３通りが考えられます。

処理１は、“注”が出てきたその場で“注”を読む。

処理２は、文章の区切りのいいところで“注”を読む。

処理３は、章の終わりや巻末、別巻などにまとめて録音する。

いずれかの方法を選択する事になりますが、場合によっては、併せて処理することもあるでしょう。また、“注”の処理が決まったら、録音図書凡例で忘れずにコメントしておくことが必要です。

例１．「“注”は本文の区切りのいいところで入れてあります。」

例２．「“注”は本文では“注”番号のみ読み、別巻にまとめて録音してあります。」

例３．「“注”はその場で入れてあります。」

例４．「（“注”の種類によって処理を変える時は、その説明）」

例１、例３などは、はっきりしていますので、あえてコメントする必要はないと思いますが、例４の時には、事前にコメントしておかないと、聞く方は混乱することになりますので　注意しましょう。

“注”の種類や内容は様々です。本文を補足する用語解説的なものや、出典や参考文献をあげたもの、頭注などにみられる要旨を記したものなどなどいろいろです。それぞれの“注”の役割を考え、どのように処理するのかは、全体によく目を通してから判断する必要があります。よく一部だけを見て判断し、後半で非常に困ることもありますので注意してください。“注”の処理を決める材料としては、

１．本の内容によって“注”の扱いを判断する。（小説や対談集などの“注”と医学書などの専門書の場合の“注”の扱い。）

２．“注”の役割を考える。（本文中で読むか、後でまとめて読むか）

次に、“注”を読む時の注意点については、

１．“注”が訳者注、著者注と区別してあるときは、「注」と言うだけでなく、「著者注」「訳者注」と区別する必要があります。

2．また、“注”が章ごとにまとめて掲載されている時は、“注”には番号がふってあるのが普通です。“注”をその場で読むときには　注　番号はあえて読む必要はないでしょう。

3．文章の区切りのいいところで“注”を読む時も、“注”の項目が再掲されているときは、あえて　注　番号を読む必要はないでしょう。（読んではダメという事ではありません。）

しかし、“注”の項目が再掲されていなくて、文章の区切りにある場合、その場で「注○○」と言って“注”を読み始める事がありますが、この場合は注番号は２回言う必要があります。最初の注番号は“注”の位置、２回目の注番号は“注”を読みますよという意味です。ともすると１回だけになることがありますので注意してください。

4．出典が同じときなどに前掲書とか、同書とあるのをそのまま読むことがありますが、すぐ前に出ている時は、解ることもありますが、やはりこの場合は「同書」、「前掲書」ではなく、再度読む必要があるでしょう。

5．“注”を後でまとめて読む場合、本文では　注　番号が必要になりますが、この場合、本文の読みとは調子を変え（声を落とす）、言い添えるように読み、本文の流れが途切れないように注意しましょう。

6．“注”を本文中で読むと、本文の流れが解りにくくなることは避けられません。“注”を読む場所は充分検討する必要があります。この場合も、すぐ読んだりかなり後で読んだりとバラバラになると、聞き手はいらいらすることになりますので統一した入れ方が必要でしょう。ただ録音図書凡例で処理をはっきりさせている場合は別ですが。

“注”の処理を失敗するとせっかく苦労して音訳した図書でもガタガタになることがあります。“注”が複雑な場合、一度決めた処理にそって録音してみて、本文との関係で分かりにくくないか、処理は適当かなどを校正者、ペアの方に聞いてもらうことも必要でしょう。実際に録音してみるとまた疑問がでることもあります。繰り返しますが、“注”は様々なものがありますので、その本にふさわしい“注”の処理ができるよう工夫する努力をしてください。

（清水）

＊ 前回の「打ち合せの例」で、著者の読み方について次のような疑問が出されました。

Q　著者が４人のとき、○○他著とすると、○○の人が代表者と思われてよくないのではないか。４人全員を読むべきだと思いますが。

A　ご指摘の点は、まったくその通りと思います。この本の場合、４人の著者がそれぞれの章を担当し、代表者的な著者はありませんので、本来は４人全員を読むべきだったと思います。今後、「ほか著」とする場合は、明らかに代表者と思われる扱いが、表紙や奥付などでされている場合、あるいは原本自体に「ほか著」と書かれている場合などに限るようにしていきたいと思います。

漢字「一字」の場合の字の説明

音訳者による漢字の説明は苦労されることの多い問題だと思います。この問題について最近、校正表で2、3指摘がされていましたので、漢字一字の場合の字の説明を考えてみました。まず、音訳者が漢字を説明するときには、次の2点に留意する必要があります。

＝　漢字の説明をするときの注意事項　＝

1．聞き手が漢字の説明をしているのだなと解るようにする。
2．漢字の説明は、字を解らせるだけでなく、本文の漢字との関連を考えて、よりふさわしい説明をする。

さて、1．の問題ですが、最初から漢字の説明をするときに音声訳者注と言って字の説明をするときには、字の説明だなと聞き手も解り易いと思いますが、音声訳者注を言わずに漢字の説明をするときには注意が必要です。特に、漢字一字の時の説明には注意が必要です。
「誠」を「せい」と読むときの例を考えてみます。　＊カタカナ半角は声を落とす読み

例1．○○○○○せい、ﾏｺﾄ、○○○○○○、
例2．○○○○○せい、ｾｲｼﾞﾂﾉｾｲ、○○○○、
例3．○○○○○せい、ｾｲﾊ、ｾｲｼﾞﾂﾉｾｲ、○○○○○、

例1では、「せい、まこと」と並列に取られる恐れもあります。少し、声を落として読むだけでは、解りにくいこともあるでしょう。また、「せい、ﾏｺﾄ」だけでは「誠」の漢字をすぐに思い浮かべる人は少ないのではないでしょうか。（まこと＝誠・真・実）漢字一字の時の説明では、熟語などを使って説明した方が良いようです。

次に2．の問題についてですが、字を解らせるだけではかえって混乱することもあります。使われている字の意味に、より近い例をあげて説明する必要があります。

例文　初句の「このたびは」は、「この旅は」ととるが、「度」と「旅」とがかけられ…。　（『百人一首の鑑賞』より）

音訳例1．しょくのこのたびはは、このたび、ﾘｮｺｳﾉﾘｮ、は、ととるが、たび、ｵﾝﾄﾞﾉﾄﾞ、と旅、ﾘｮｺｳﾉﾘｮ、とがかけられ‥‥

音訳例2　しょくのこのたびはは、このたび、ﾀﾋﾞﾖｽﾙﾉﾀﾋﾞ、は、ととるが、たび、ｲﾏﾋﾄﾀﾋﾞﾉﾀﾋﾞ、と、たび、ﾀﾋﾞﾖｽﾙﾉﾀﾋﾞとがかけられ‥‥

音訳例3　しょくのこのたびはは、このたび、ﾀﾋﾞﾖｽﾙﾉﾀﾋﾞ、このたびは、ととるが、たび、ﾀﾋﾞﾀﾋﾞﾉﾀﾋﾞと、たび、ﾀﾋﾞﾖｽﾙﾉﾀﾋﾞとがかけられ‥‥

音訳例4　しょくのこのたびはは、このたび、ﾀﾋﾞﾖｽﾙﾉﾀﾋﾞ、このたびは、ととるが、たびとたびとがかけられ‥‥。ﾊｼﾞﾒﾉﾀﾋﾞﾊ、ﾀﾋﾞﾀﾋﾞﾉﾀﾋﾞ、ｱﾄﾉﾀﾋﾞﾊ、ﾀﾋﾞﾖｽﾙﾉﾀﾋﾞ、‥‥

例1では、度の字を温度の度と説明していますが、温度の度では、意味がかえって解りにくくなってしまいます。私達は、温度の度が度々の言葉にも使われていることはすぐにわかりますが、利用者にはなんのことかと思い悩む方もあるのではないでしょうか。文章の使われている字の意味から、かけ離れた字の説明は極力避けるようにしましょう。

☆　☆　☆　☆　☆　☆

家庭録音（カセットテープ）　Q＆A

Q：　録音開始は２０秒以上の空白がなぜ必要なのですか？

A：　カセットで録音するときは、リーダーテープが終わるとすぐに録音をされる方があるようですが、必ずリーダーテープ（約5、6秒分あります。）も含めて２０秒くらいの空白をとってから始めるようにしましょう。これは、1)リーダーテープの長さはメーカーによってまちまちですので、コピーしたときに頭が入らなかったり、2)また、コピーは高速（8倍の早さ）で行いますので、最初の立ち上がりのときに、あまり空白がないときれいにコピーされないことがあるからです。

Q：　校正の時に、誤って消してしまうことがあるのですが‥‥。

A：　カセットテープで録音したものを校正する時、ついうっかり録音ボタンを押してしまい消してしまうことがあります。こんなとき、ツメを折っておくと、まちがって録音ボタンをおして消してしまうことがありません。（ツメが折ってあると録音状態にならないからです。）ツメは押し込むだけで簡単に折れます。校正が済んで訂正するときには、セロテープでふさげば録音できます。

枠アナウンスは正しく入れましょう！

●枠アナウンスはテープ図書の顔ともいえます。特に１巻めのはじめの枠アナウンスは正しく読むことが大切です。枠アナをおろそかにするとその先を聞く意欲を削ぐことにもなりかねません。きまり文句は、一度正確に覚えてしまいましょう。アクセント記号や間を新井先生の協力を得て表記してみましたので参考にして下さい。

テープ　ダイ　イッカン　エーメン。

ビーメン　ニカン　サンカン　ヨンカン　ゴカン　ロッカン　ナナカン
ハッカン（ハチカン）　キューカン　ジュッカン　（ジッカン）

ニッポン　ライトハウス　モージン　ジョーホー　ブンカセンター、

センキュウヒャク　キュージューネン　○ガツ　○ニチセーサク。

イチガツ　ニガツ　サンガツ　シガツ　ゴガツ　ロクガツ　シチガツ
ハチガツ　クガツ　ジューガツ　ジューイチガツ　ジューニガツ
ツイタチ　フツカ　ミッカ　ヨッカ

オンセーヤク、○○○、　コーセー、○○○、○○○、ヘンシュー、△△△。

ゲンポンオクヅケ、・・・・・・　ゲンポンオクヅケオワリ。

チョシャ　ショーカイ、・・・・・・・　チョシャ　ショウカイオワリ。

ロクオントショ　ハンレー、・・・・・・・　ロクオントショ　ハンレイオワリ。

モクジ、・・・・・・・　モクジオワリ。

エーメンヲ　オワリマス。コノママノ　イチデ　ビーメンヘ　オマワシクダサイ。

コノアトニハ　ナニモ　ロクオンシテ　アリマセン　ハヤオクリデ
（マキモドシデ）サイゴマデマキトッテカラ　テープヲ　トリダシテクダサイ。
（トリダシテクダサイ）

正誤表から・・・・・その２

語句	誤読	正しい読み	語句	誤読	正しい読み
未曾有	ミゾーウ	ミゾー　ミゾウ	除ける	ドケル	ノケル
出獄	シュツコク	シュツゴク	微塵も	ビジンモ	ミジンモ
相接して	ソーセツシテ	アイセッシテ	中山道	ナカヤマドウ	ナカセンドウ
難路	ナンジ	ナンロ	悪気がある	ワルゲガアル	ワルギガアル
一所懸命	ｲｯｼｮｳｹﾝﾒｲ	ｲｯｼｮｹﾝﾒｲ	和やか	オダヤカ	ナゴヤカ
赤褐色	ｱｶｶｯｼｮｸ	ｾｷｶｯｼｮｸ	近世説	キンセセツ	キンセイセツ
姉ｻﾝ女房	ﾈｴｻﾝﾆｮｳﾎﾞｳ	ｱﾈｻﾝﾆｮｳﾎﾞｳ	水面	ミズモ	ﾐﾅﾓ　ｽｲﾒﾝ
白衣	ビャクイ	ﾊｸｲ　ﾊﾞｬｸｴ	愛想	アイソウ	アイソ
嫡出子	テキシュツシ	チャクシュツシ	逆手にとる	サカテニトル	ギャクテニトル
上座	ジョウザ	カミザ	白杖	シロツエ	ハクジョウ
賃貸料	ﾁﾝｼｬｸﾘｮｳ	ﾁﾝﾀｲﾘｮｳ	出国	シュツゴク	シュッコク
質し	シッシ	タダシ	隣国	リンコク	リンゴク
一夕	イチユウ	イッセキ	容態	ヨウタイ	ヨウダイ
下世話	ゲゼワ	ゲセワ	骨片	コツヘン	コッペン
懇望	コンボウ	コンモウ	大地	タイチ	ダイチ
多作家	タサッカ	タサクカ	中国ﾌｧﾝﾄﾞ	チュウゴク・・・	チュウコク・・・

「逆手」はギャクテ、サカテ？？？

正誤表の作成はかなり手直しをしています。今回の欄の最初には、「河川敷」「言質」をとりあげ、カセンジキ、ゲンシツは間違にしていましたが、１９８９年度版のＮＨＫ編「日本語アクセント辞典」によると、どちらもあり現在では間違いとも言えなくなっているようです。さて、今回皆さんが気になるのは、「逆手」ではないでしょうか。「逆手」の読み方は、辞書にはどちらもありますが、「逆手をとる」は「サカテヲトル」とはいわないようです。日本国語大辞典によると、「逆手」（サカテ）は、１．古代の手の打ち方の一つ。人をのろう時や凶事の時に打つかしわ手。とあり、「逆手」（ギャクテ）は、１．柔道などで、相手の関節を反対に曲げて痛めつけるわざ。２．相撲などで使ってはいけない危険なわざ、などでています。しかし、「逆手にとる」は「ギャクテニトル」ですが、「逆手を打つ」は「サカテヲウツ」「ギャクテヲウツ」の両方とも言うようです。

―― 係からのおしらせ ――

― 「古典の勉強会」　4月２５日（水）10:00～12:00　―

講師の都合で延期となっていました、古典の２回目の勉強会を４月２５日（水）に行います。資料は事前にお渡ししていますので参加される方は忘れずにお持ちください。資料は余分にありませんのでよろしくお願いします。

尚、９０年度の専門別音訳研究会は、会場の都合もあり現在検討中です。決まり次第『ろくおん通信』でお知らせいたします。

― 訂正済みのソーステープは、絶対にコピー依頼棚に置かないでください。 ―

１巻読み終えたら、コピー依頼棚にソーステープを置いてもらっていますが、訂正済みのソーステープをコピー依頼棚に置かれる方があります。再度校正者に校正を頼むことになりますので、訂正済みのソーステープは、**編集者の棚**か、編集者が決まっていない時には、**編集待の棚**にかならず置いて下さい。何回も同じものを校正依頼するケースが出ています。

― 新井先生のケアについて ―

● ケアを受ける日について ―

現在、新井先生のよるケアの曜日は、火曜日と水曜日の午後１時半から４時半ごろまでです。ケアは事前に受けて頂くようお願いしておりますが、本によっては並行してケアをお願いしている物もあります。ケアを受ける曜日は、週に２日しかありませんが、できるだけスタジオでの録音日を避けて受けていただくようお願いします。

● カセットテープによる診断について ―

スタジオで録音したものを、カセットテープにコピーし、個人ケアの日で余裕のある時に新井先生に聞いて頂いています。診断表は個人のファイルに入れて置きますので参考にしてください。実際に録音したものを聞くとまた違った問題なども出てきますので、できるだけカセットテープによるケアも進めていく予定です。声は良くでているか、言葉がすべっていないか、聞いていて疲れないか、読み方はふさわしいか、録音状態はどうか、など職員も交えながら聞いていきます。

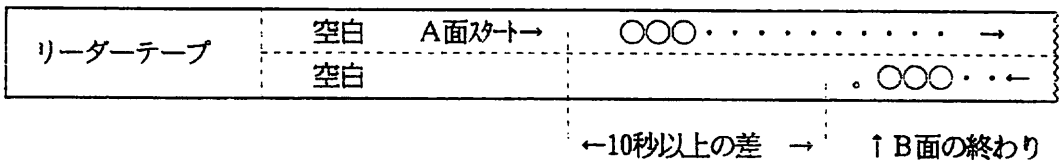
― 音訳の進行状況について ―

世話人体制に移行して、早くも4ケ月が経過しました。スタジオでの作品は、毎月最低10タイトルは発表していく必要がありますが、3月、4月、5月ともに9タイトルづつ発表してきています。作品によっては、完成するのに時間のかかるものもあると思いますが、半日の録音では片面、1ヶ月で少なくとも2巻は音訳できるよう努力をお願いします。月に1巻のペースの方もおられますので、スピードアップの努力もお願いします。

― B面の録音時間は、どんなに長くても、A面より10秒以上は短く ―

B面の録音時間がA面より長くなっている人もあります。A面より録音時間が長くなりますと、カセットにプリントした時に、B面の終わりがコピーされなくなります。必ずA面よりは10秒以上は短く終わるようにしてください。

図1　↓A面のはじめ（カセットテープ）



―― 係からのお知らせ終わり ――

編集後記

▼漢字の説明にも、いつも頭を悩ませます。これから読む本に、こんな所があります。皆さんなら、どう説明して読まれますか？「広州、長安のあいだは長江の本流を通らずに、杭州経由のルートもあった。杭州から揚州までは運河でつながっている。そして銭塘江の水路によって洪州へ行くことできた。」（「NHK海のシルクロード第6巻」より）なお、この文章には他にも江州、交州もでてきます。いずれも読みはコウ州。▼さて、新しい体制になり、同じ曜日の仲間の校正をしています。読み方、処理の方法など、いろいろ参考になる事が多く、それぞれ個性があって面白いものです。以来、自分のテープがどう聞かれているのか心配になり、次回に録音する分をテープに入れ、本を見ずに出来るだけ客観的に聞いています。その内に、少しはマシになるでしょうか。　（土田）